

## その 40

### 万葉ファンタジア

#### 『万世集から万葉集へ』(その 2)



春日山を煌々と照らす月。大伴家持の館である佐保の大納言邸。政情穏やかならぬ、ある夜遅くのこと、世の中の不穏な動きが気になり、家持、なかなか寝つかれずウツラウツラしていると、館の庭に何やら怪しい気配を感じ、そっと起き上り太刀を手にとりて声をかけました。

「だ、誰じゃ！そこに潜んでいるのは……何者じゃ！」

「シー……家持さま、オミナエシでございます」

「何？オミナエシ？……<sup>おみなえし</sup>女郎花とな？……もしや、池主どのか？……いや、女郎花どのか、久しぶりじゃ。中に入られよ」

「いえ、このままでお聞きください」

「このままでとは？……それにこのような時刻に何用じゃ？」

「家持さま……女郎花の時は終わりました」

「女郎花の時が終わった？……女郎花が終わる時期にはまだ早いが？」

「家持さま、家持さまとは女郎花の歌の相聞以来、数多歌のやり取りをして参りました」

「女郎花の歌……初めての越中での歌会のことじゃな？」

「その通りにございます。もはや、歌や女郎にうつつを抜かしている時ではありません。大伴一族の氏上として、一族をお守りいただく……その時がまいったのです。一族のために、家持さまに立ち上がっていただく時が参りました」

「……」

「家持さま！家持さまに今立ちあがっていただかなければ大伴一族は滅びてしまいます」

「一族のことは言われずとも心を痛めておる」

「越中で歌のお相手をさせていただいた時は楽しうございました。しかし、今は歌を詠み歌集を編んでいる時ではございませぬぞ」

「それはもとより承知のことじゃ」

「家持さま、仲麻呂さまの政まつりごとはあまりに無道が多いのです。それをそのまま見過ごされるおつもりですか？われらが主奈良麻呂どのは、ついに立ち上がる覚悟を固められましたぞ」

「何！奈良麻呂どのが……ならぬ、それはならぬことじゃ！」

「家持さま、今なんと申されました？」

「ならぬ、と申した。奈良麻呂どのともあろうお方が……軽拳妄動は慎まねばならぬ」

「家持さまは、かつて奈良麻呂さまに、命を懸けて『息の緒おに思ふ』というお歌を贈られたのではないのですか？」

「その通りじゃ。それがゆえにお命が大事なのじゃ。争い事はならぬ」

「家持さまには、何より私ども大伴一族の氏上として今立ち上がっていただかなければならぬのです」

「氏上だからこそ、それはできぬ。氏上として、そのような無謀なことはできぬのじゃ」

「今立ち上がらないことの方が無謀でございます」

「大伴の名は、代々人の鏡になるべき立派な名じゃ。かりそめにも明あかき心のものゝふの名を汚すことはならぬのじゃ。争うてはならぬ。一族を巻き込むことはならぬ。わしが立ち上がることで、一族郎党を巻き添えにするのが怖いのじゃ。」

「……その立派な名を汚さないために、今戦わなければならぬのです……そうですか……家持さまは戦うことが怖いのですね。物怖じしているのですね」

「いや、怖気づいてなどおらぬ。大伴一族のためと思えばこそじゃ。怖気づいているわけでは断じてない」

「……そうでございますか……家持さまのお心の内よ～く分かりました……やはり、『万世集』でございますね」

「万世集のこと、ご存知であったか？」

「はい。家持さまには、長年にわたり『万世集よろずよしゅう』なる歌集を編まれておられることは耳にしておりました」

「その通りじゃ。今は亡き奈良麻呂どのの父上橋諸兄さまと約束した、万世に語り伝える歌集『万世集』じゃ」

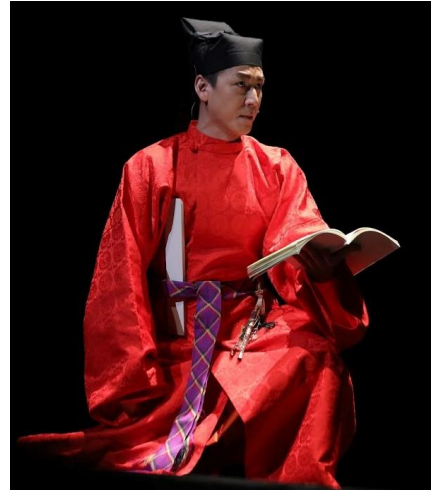
「そうでございますか……私も、越中以来ともに歌を詠み楽しんでございました。家持さまには、これからも良き歌を詠み、良き歌集をお作りください」

「女郎花どの、いや、池主どの、くれぐれも早まれるな！」

「それでは、今宵の話は聞かなかったことにしてくださいませ。ごめん」

「そのように埒もないことを。池主どの、顔だけでも、最後に！……ならぬ、争いはならぬ、池主どの……奈良麻呂どのに……」

こうして、わが大伴一族の池主どののは私の前に姿を現すことなく、その足音は夜の闇の中を遠ざかって行きました。これが、大伴池主どのとの最後の別れとなりました。



それからしばらくして、怖れていた事件が起きたのです。

天平宝字 1 (757)年 5 月、奈良麻呂どのや大伴池主どのらが立ち上がったのです。世に言う橘奈良麻呂の変です。諸兄さま亡き後、時の権力を握った藤原仲麻呂どのに、諸兄どのの長子橘奈良麻呂どのが不満を持ち、仲麻呂どのを殺害して新しい天皇を擁立しようとする。しかし、密告により計画が発覚、首謀者として奈良麻呂どのの他一族の従兄弟大伴古麻呂どの、そして池主どのなど多くの人々が逮捕され厳しい取り調べを受けたのです。

ある夜、数人の役人が、家持の館にどやどやと押し入ってきました。その最後に乗り込んできたのが、仲麻呂どのだったのです。

「これは、藤原仲麻呂さま、このような夜分  
になにごとにございます？」

「いんや、ある話を聞き及んだのじゃが……」

「どのようなお話にございましょうか？」

「白々しく知らぬ顔をしておるが、お身はどう  
にご存知であろう」

「何ごとにございましょう？」

「謀反じゃ……橘奈良麻呂どのがこのみ此身を  
殺めようとした企ての話じゃ」

「謀反？……奈良麻呂どのが仲麻呂さまを？まご真にございますか？」

「家持どの、お身も、この企てに加わっているのではあるまいな？」

「仲麻呂さま、とんでもない濡れ衣にございます。そのような企てには加わってはおりませぬ」

「橘奈良麻呂どの、いや、池主あたりから誘われたのではないか。どうじゃ！」

「奈良麻呂どのから、そのような話は一切ございませぬ。とんでもない言いがかりにございます」

「言いがかりとは面妖な。奈良麻呂どのの企てを認めておりますぞ。『仲麻呂さまの政はあまりに無道が多い』  
と認めたのじゃよ！」

「そのようなことは知りませぬ。断じてそのようなことはございませぬ。仲麻呂さまは、私に申されたではありませんか。『此身とお身は、同じ貴人じゃ。自ら話も合おうと言うもの。やはり神代以来の氏上づき合いが、ええ』  
と。そのような仲麻呂さまを殺める企てに加わる訳がございませぬ」

「ならば、家持どの！家持どのの、私の政をどのように思うておられるか？」

「ウツ……」

「そら、答えられぬではないかのう」

「……大和の国は、古より大君が政を司ってまいりました。われわれ臣下は、その大君の政をお支えしお守り



仲麻呂役：山崎清介

家持役：和泉元彌

するのがお役目にございます」

「その通りじゃ。だからこそ、われわれ臣下が政をお支えしておるのじゃ。その政が無道とは何事じゃ。私、仲麻呂の政をなんと心得るか！」

「仲麻呂さまとは、これまでともに大君をお守りすると、親しくお話しもしてきたではありませぬか。政はあくまで大君のもの。そうでなければ、国はまとまりませぬ」

「なに、この私が大君をないがしろにしているとでも申すのか！ 国がまとまらぬのは、橘一族やお主たち大伴一族のせいではないか！ お主の一族が問題なのじゃ！ 大伴の古麻呂や池主が、奈良麻呂を唆しておるのじゃ。お主にも、企ての話があったであろう！」

「そのようなことはありませぬ。断じてございませぬ」

「シラを切っても証しは拳がっておるぞ。シラを切り通すのならば、杖もて打て！」

「ウッ……池主らと企てなどいたしませぬ。この家持、『軽拳妄動を慎め』と、『一族に諭す歌』を詠んでいることも、仲麻呂さまは、とうにご存知にございましょう！ 池主とは、大伴の一族たるもの、明き心もて大伴の名を汚してはならぬ、と話ただけでございます」

「そら、やはり、企てに加わっていたのではないか。打て、もっと打て！」

「ウッ……知りませぬ、そのようなことは一切知りませぬ」

「大伴一族の氏上のお主が知らぬわけはなからう。そもそもお主は、かつて奈良麻呂の父橘諸兄と謀って謀反を企てたというではないか」

「そのような<sup>はかりごと</sup>謀 など一切ありませぬ」

「何やら、諸兄どのと相図って、『万世集』なる謀議の書をいまだに作りおると聞いておるが？」

「謀議の書？ ……『万世集』などという謀議の書はございませぬ」

「橘や大伴一族が、万世に栄え寿ぐ集まりを企てた時の書だと言うではないか。その『万世集』を一体どこに隠し持っておるか？」

「そのような書を隠して持ってはおりませぬ」

「白々しい顔をしておって。あくまでシラを切るのか！ 逆賊をもっと強く打て！ 打て！」

「ウッ……ウッ……やめろ、やめてくれ。そのような謀議の書はありません」

「皆のもの、謀反の証、『万世集』を探し出せ！ 館の隅から隅まで探し出せ！」

「ウッ……ウッ……やめろ、やめてくれ……白状するからやめてくれ！ 助けてくれ！」



「あなた、家持さま、どうされたのですか？大きな声を出して叫んだりして……目を覚ましてください」

「ウツ、分かった、白状するよ、白状するからやめてくれ！」

「エッ、あなた、何を白状するのですか？目を覚ましてください。何を白状するとおっしゃるのですか？あの女郎のことなのですか？」

「やめてくれ！助けてくれ……ウツ……夢か……おお、お前か？大嬢か？」

「いかがされましたか、家持さま？」

「いや、『万世集』は大丈夫か？異常はないか？」

「何のことでございますか？『万世集』とは何でございますか？」

「『万世集』のことについては、いずれお前に話す……それにしても怖かった、恐ろしかった。池主どのの言う通り、私はただ怖いだけの腰抜けだったのか」

奈良麻呂どのの父上橋諸兄さまの最後も、陰謀の影が垣間見えたものでした。敬愛する聖武上皇の病に際して飲酒の席で不敬非礼の言辞があったということで誣告され、天平勝宝 8（756）年自ら辞職を申し出て官位を退く、いわゆる致仕<sup>ちし</sup>をいたします。心ならずも隠居の身となった 3 カ月後に、聖武上皇崩御。その翌年後を追うように橋諸兄さまも身罷<sup>みまか</sup>られます。

その後、わが一族の大伴古慈斐<sup>こしび</sup>が、弘文天皇の孫淡海三船とともに、朝廷を誹謗したという理由で捕えられたのです。そこで、私、家持は、一族に宛てて一篇の長歌「族を諭<sup>やから</sup>す歌」を作り、明<sup>あか</sup>き心もて清き名を汚してはならぬと訴えました。

橋奈良麻呂の変では、首謀者として奈良麻呂どのや大伴古麻呂、大伴池主等が逮捕され厳しい拷問を受けます。「続日本紀」は、巻 20 で、概略次のように記録しています。

奈良麻呂どののは、藤原永手どのの尋問を受け、「逆謀、何によりてか起せし」と問い詰められます。それに対し、奈良麻呂どののは「仲麻呂さまの政を行ふ甚だ無道多し。故に先ず兵を発した」と昂然として言い放ち、その後もやり取りが続きます。

「政を無道多しというは、いかなることをか謂<sup>い</sup>ふ」

「東大寺を造りて、人民<sup>たしな</sup>苦しむ辛む。氏々の人等もまた、これを憂<sup>うれ</sup>とす」と、答えると、永手どののは、お前の言う氏とは誰のことかと問い詰めるのです。

「いふ所の氏々とは、いずれの氏をか指す。また、寺を造ることはもと、汝が父橋諸兄の時より起れり。今、人の憂<sup>こと</sup>へという。その言似<sup>こと</sup>ず」

こう問われると、奈良麻呂どののは、「辞<sup>かま</sup>屈<sup>まつら</sup>りて服<sup>まつら</sup>ふ」、言葉につまんで屈服されました。

こうして、「拷掠窮<sup>ごうりやう</sup>め問<sup>ごうりやう</sup>うせしむ」、一同絡めとられて拷問にかけ、厳しく問い詰められたのです。

後の世に、ある学者が、いみじくも、「記紀」は勝者である権力者の書で、「万葉」は敗者の怨念の書というように、「続日本紀」は、藤原家から見た奈良麻呂の変だったのでしょうか。

その後奈良麻呂どのは生死不明となりますが、獄死されたのでしょうか。大伴古麻呂どのは、父旅人の叔父、私にとっては大叔父に当たり、大伴一族の重鎮の一人です。私が幼き時父上の見舞いの使者として大宰府に来られ、私が父上の名代としてお見送りしたこともありました。この時、私、家持の名前が万葉集に初登場いたします。年齢 13 の時のことでした。

天平勝宝 2 年に、久しぶりに遣唐使が派遣されることになった時、古麻呂どのは副使に任命され、唐に渡った後朝貢の席が新羅より下座にあると言って席を改めさせたという逸話が残す剛の者でした。その古麻呂どのは杖で打たれる拷問で死亡。そして、大伴池主どのは、厳しい尋問にも耐え断固として口をつぐみ、同じく獄死したとされています。その他謀反にかかわった人たちは一人残らず、死刑、流刑となり、その数合わせて 443 人を数えたと言われています。幼き時から愛する係累を次々と失い、また再び長きにわたって親しく歌を詠み合ってきた歌友池主どのを失ったことは、なんとも辛く悲しきことでした。



「わが一族の古麻呂、池主らは、獄中から生きて帰ることはありませんでした。彼らは歌を捨て、命を捨てて、仲麻呂の無道に抗ったのです。それなのに、私一人おめおめと生き永らえて、歌など詠んでいいのでしょうか？ ものふとして生まれた私が、歌など詠って・・・私には、この家持には、歌を絶つしか生きる道はありませんでした」

翌年、この事件の巻き添えによるものか、家持はいなほのかみ因幡守として、現在の鳥取へ遷任され、翌年の正月、万葉集の最後の歌、そして、家持自身の最後の歌を詠み、家持は、それ以降、歌を断つのです。16 歳の時から 26 年間にわたって、万葉集全 4516 首の内、473 首もの歌を詠んだ歌人大伴家持が、それ以降亡くなるまでの 26 年間、「歌わぬ歌人」になるのですが……その心中は、いかばかりだったのでしょうか。

